

氏名（本籍）	関崎 博紀（埼玉県）
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博乙 第 2713 号
学位授与年月日	平成26年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本人大学生同士の会話における言語行動としての否定的評価の研究

主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	砂川有里子
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	杉本 武
副査	筑波大学 講師	博士（学術）	澤田 浩子
副査	筑波大学 准教授	博士（日本語学）	ブッシュネル・ケード

論文の要旨

本論文は、日本語の会話において行われる否定的評価を、会話参加者の相互行為という観点から分析することを目的とする。

本論文では、否定的評価を「会話の相手と、相手に属する人／モノ／コトに対して価値が低いと価値づけ、それを表現すること」と規定する。会話の相手に対してこのような否定的評価を表現することは、対人関係を悪化させかねない危険なことがらである。しかし、我々は、会話の過程のさまざまな局面で否定的評価を伝え合っているし、むしろそのような行動を行うことで互いの連帯感を確認し合うということすら日常的に行われている。そしてそのような行動を取る際には、何らかの配慮や方策を講じ、関係を維持しようとする試みが伴っている。否定的評価に伴うこのような配慮や方策、あるいは処置としての言語行動を明らかにすることは、良好な対人関係を構築し、維持する方法を明らかにするという点で重要な課題であるし、異文化理解や第二言語教育という側面でも重要な示唆を与えるものである。そこで本論文は、実際に行われた自然会話をデータとして否定的評価を分析する。

本論文で使用するデータは、親しい日本人大学生や大学院生同士による自然会話 20 組（男女各 10 組）である。本論文では、そこに現れた否定的評価がどのように開始され、収束していくか、その過程を詳細に記述し、分析することが目ざされる。具体的には、否定的評価の対象、表現方法、否定的評価が行われる発話のきっかけ、否定的評価が行われる手続きのデザインについての分析である。また、否定的評価の発話が始まってから収束されるまでに見られる相互行為のあり方を詳細に記述し、Brown and Levinson(1987)によるポライトネス理論の枠組みによってその特徴を分析することを通じて、フェイスへの配慮という観点から一連の相互行為についての考察を行う。

本論文は以下の 8 つの章で構成されている。

序章 本研究の目的

第 1 章 先行研究と本研究の位置づけ

第 2 章 研究方法

第 3 章	否定的評価の対象
第 4 章	否定的評価の表現方法
第 5 章	否定的評価の開始部
第 6 章	否定的評価の開始から収束まで
終章	本研究のまとめと今後の展望

序章では、本論文の目的を述べる。

第 1 章では、評価という活動、否定的評価、対人コミュニケーションという 3 つの観点から先行研究を検討し、本論文が位置づけられる。

第 2 章では、先行研究の分析の手法を概観し、本論文で採用する手法を示す。そして、会話の収集からデータ整備までの手順が示される。

第 3 章では、否定的評価の対象を分析し、否定的評価の対象となることが多い事柄と、少ない事柄が調査される。その結果、「行動」「思考」を対象とする否定的評価が比較的多い一方で、「所持物」「外見」「外見の変化」「才能」「遂行」を対象とする否定的評価が少ないことが示される。さらに、Brown and Levinson(1987)の FT 度 (degree of face threatening) の観点から考察し、FT 度が低い「行動」や「思考」などを対象とする否定的評価は、評価を明示的に、程度を強めて述べられるのに対し、FT 度が高い「外見」「才能」などを対象とする否定的評価には、程度を弱く押さえる、相手のフェイスへの補償が行われる等の配慮が伴うことが論じられる。

第 4 章では、否定的評価の表現方法について論じ、評価を表す言語形式の有無にかかわらず、心理的な活動としての評価を構成する要素、すなわち、対象となる「事柄」、評価の「基準」、その結果の「価値づけ」のいずれかに言及することで、発話が否定的評価として機能することが示される。さらにこれらが選択される際の条件について、フェイス侵害やフェイス保持という観点から論じられる。

第 5 章では、否定的評価の発話のきっかけを調査し、否定的評価の約 35%が相手の逸脱した発話をきっかけとしてその直後に述べるという直接的な行動が取られていることが報告される。さらに、その原因について考察し、これらの否定的評価の FT 度が低いと受け止められることによると結論づけられる。また、FT 度が比較的高い評価については、相手が否定的な側面を認めた状況で述べられるなど、何らかの配慮が行われていることが示される。一方、否定的評価のデザインについては、発話が相手のフェイスを不当に侵害しないよう配慮されていること、具体的には、根拠となる事例や事実の提示、あるいは確認が伴われ、評価内容の妥当性が相互に確認されるという手続きが踏まれていることが示される。

第 6 章では、否定的評価の談話が収束するまでの相互行為について詳細な観察が行われ、侵害されたフェイスの回復やフェイス不均衡の是正の方法として、① 侵害された相手のポジティブ・フェイスを充足する、② あとから遡って FT 度を軽減、または否定する、③ 相互に FTA を行うという 3 つのパターンが存在することが示される。また、これらのパターンは、FTA の行い手と受け手の双方による協働的な相互行為によって実現されること、および、各パターンの相互行為において、きめ細やかな調整が行われていることが、データに即して実証的に論じられる。

終章では、本論文の意義について、対人関係調整理論への貢献と、日本語教育への示唆という観点から論じ、残された課題と今後の展望が提示される。

審査の要旨

評価の言語行動に関する従来の研究は、肯定的評価である「ほめ」に偏っており、否定的評価に関

する研究は極めて限られている。本論文は大学生の自然会話データを用いて否定的評価の行動を観察し、会話参加者の相互行為による人間関係の調整という観点から否定的評価の言語行動を分析したものである。

本論文で明らかにされたのは、否定的評価のやりとりに伴う会話参加者の相互行為的な配慮表明行動の詳細とそれを統率する原理である。否定的評価の研究は、これまでに、会話で用いられた単語や文のレベル、あるいは数回程度のターン交替のレベルではなされていたが、否定的評価の開始直前から終了直後までの一連のやりとりの中での行動を分析しようとした研究は数少ない。本論文の特に優れた点は、会話参加者同士の対人関係の調整という問題を、フェイス侵害に至るまでの行動、フェイス侵害行動を開始するきっかけ、フェイス侵害行動の収束、フェイス侵害後の行動、といった一連のプロセスにおいて、会話参加者によってその時々によりやりとりされる配慮の表明行動として記述し、それらの行動を統率する原理を、**Brown & Levinson(1987)**のポライトネス理論の枠組みを用いて解明しようとした点にある。具体的には、フェイスを侵害する度合い（FT 度）の強弱が否定的評価の手続きの複雑さの程度と関係すること、フェイスが侵害された際に、互いのフェイスを保持するために様々な調整行動が取られてバランスを保とうとする手続きが取られることなどを、自然会話データの裏付けのもとに実証的に検証したところが、これまでにない斬新で意欲的な試みであり、本論文のもたらした大きな成果である。

ただし、大学生による会話というデータの特殊性を鑑み、異なる特性のデータにまで対象を広げれば、日本人一般の言語行動の解明につながる研究にまで深められたものと思われる。また、収録された映像データに関する分析にも手を付けられれば、より精密な配慮表明行動の記述となったはずである。しかし、これらの問題は、本論文のさらなる発展性を保障するもので、本論文の価値をいささかも損ねるものではない。本論文は対人関係調整行動の研究に、否定的評価と配慮表明行動という観点から重要な知見を加えたのみならず、その方法論についても新しい可能性を示したという点で、大きな貢献をなすものである。また、日本語教育や異文化理解教育という観点からも、重要な示唆を与えうる基礎研究として高く評価できる。

平成 26 年 9 月 25 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条 (2) に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。